

# 整形外科外来だより

No. 18 2010/04/01 けいゆう病院 整形外科 発行

## ◆異動のお知らせ◆

3月4月は巷の例に漏れず当院においても大きな異動の時期です。4月1日より新たに古川医師が赴任致しました。整形一般のほか、脊椎外科においては慶応大学で研究成果をあげており特に力を入れております。一方では残念ながら、看護師の守屋さんは院内の異動で、柳生さんは学業に専修するために整形外科を離れることになりました。これまで大変お世話になりました。4月からは引き続き添田さんを筆頭に、看護師の手塚さん、クラークの森さん、秘書の宗さん、そして新たに加わった看護師の清水さん、宮田さんで対応させていただきます。何卒宜しくお願い致します。

## ◆人工関節のお話◆

人間の身体の機能を代償する器械を人工臓器と総称しますが、人工関節はそのうちの一つになります。最近では人工心臓も治験段階で応用されてきていますが、人工関節は器械そのものが自ら動くという機能を必要としないため、数十年前からいち早く実用化されています。部位としては股関節と膝関節がその大半を占め、日本では1年間で併せて10万例以上施行されています。したがって、決して特殊ではなく標準的な治療法と言ってよいでしょう。

さて、人工関節の治療はどのような場合に選択されるのでしょうか？ 具体的な適応症としては変形性関節症が圧倒的に多く、ほかに関節リウマチなどがありますが、そのなかでも「痛み」と「変形(主にレントゲンで評価します)」が揃って重症であることで人工関節の治療が考慮されます。痛みが強くてもレントゲンで関節の変形がまだまだ軽い場合は、自分の骨の一部を摘出(犠牲とも言えます)してまで人工関節で置換するのは時期尚早との感があり、おそらく選択はされないでしょう。逆に、レントゲンで高度の変形があっても意外と痛みが軽い場合もあり、これも人工関節の治療を選択されないことが十分考えられます。余談ですが、薬や注射やリハビリなどの治療と、人工関節などの手術による治療との大きな違いは、前者はそれをやめることで治療前の状態に戻れるのに対し、後者は手術前の状態には戻せないというのがあります。我々医療者側が手術に対して慎重になる理由の一つがここにあります。

人工関節の治療は、患者さんにとってどのような効果が期待できるのでしょうか？ 医学的視点からは多角的にものを申すことはできるのですが、実際に人工関節を「される側」にとっては、「痛みがなくなる」ことに尽きると言ってよいでしょう。痛みが軽減することで動きがスムーズになったり筋力が回復して、歩行を始めとした日常生活動作の改善が得られるといった具合です。

「人工関節の手術は痛いんでしょう？」 まずほとんどの方がこのような印象をお

持ちかと思えます。正直に言って、これは間違いではありません。手術に伴う痛みに対して何の対処もしていなければそうなります。我々としては手を抜くことなくあらゆる努力はしておりますので、耐えうるレベルの痛みまで通常は抑えられます。この点については、患者さんの気持ちがよく表れているちょうどよいエピソードをご紹介します。両側の変形性膝関節症の患者さんで、左側はそれほど痛くなかったため、まず右側だけに人工関節の手術をしました。術後の経過は順調だったのですが、手術後の痛みは本人の予想外だったようで、「もう左側は手術しない」と言われてしまいました。1年後、反対の左膝がやはり痛み出し、我々としては手術以外の治療法でなんとか凌いでいくしかないと思っていたところ、意外にも「手術をして欲しい」と言われました。1年前の手術のことを話して思い出してもらったのですが、それでも意思は変わりませんでした。いかがでしょうか？ あえてこの患者さんの気持ちを解説すると、人工関節の治療は「後悔するほどに大変」、しかし「それを忘れられるほどに疾病そのものの改善効果大きい」といったところでしょうか。結局この方には左側の手術を行っています。

当院においては、股関節や膝関節が悪い患者さんにもなるべく負担の少ない治療法、すなわち薬や注射やリハビリなどの治療を心掛けておりますが、これに限界を感じられた場合は無駄に長引かせることなく人工関節の手術をお勧めするようにしています。結果的に毎年数多くの人工関節の手術を行っています。特徴として、膝関節においては左右とも1度の手術で完了して患者さんの負担を軽減するようにしております。また、股関節においては従来の後方からの進入による方法に加えて、筋組織のダメージを減らしてなおかつ人工股関節の最大の欠点である脱臼の可能性を少なくする前方からの進入による方法を、症例を選んで行っております。

治療が手術の話まで及ぶとなると、患者さん自身ではなおのこと判断ができないことです。まずは医師に相談をしていただくことをお勧めします。必要となれば治療のタイミングを逃さないように積極的に考えていただいてよい治療法です。

(文責 千葉和宏 内田尚哉)